

【展覧会評】

本質を写し取る作業

「アニマルズ」展（豊橋）と「フランソワ・ポンポン」展（名古屋）

豊橋市美術博物館 2021年7月17日（土）～8月29日（日）

名古屋市美術館 2021年9月18日（土）～11月14日（日）

国際ファッション専門職大学 廣田 緑

1 クマが主役の展覧会

2021年、夏から秋にかけて愛知県で開催された二つの展覧会。時代も国も異なる彫刻家による展覧会では偶然にも、それぞれの彫刻家の代表作とされる、クマをモチーフにした作品が展示された。ひとつは、豊橋市美術博物館で開催された三沢厚彦の「アニマルズ 2021 イン・トヨハシ」（写真1）、そしてもうひとつは、名古屋市美術館で開催された「フランソワ・ポンポン 動物を愛した彫刻家」（写真2）¹⁾である。

現在60歳になる三沢厚彦の作品グリズリー（ハイログマ）²⁾は、楠の丸太を彫り出したものだ。2021年8月7日（土）に会場で開催されたアーティスト・トークにおいて、三沢は二足立ちのグリズリー作品について次のように説明している。

先にクマを彫ろうと思って丸太を用意し

たのではないのです。切られた巨木を仕事場に立てたとき、そのどっしりした状態が、まるでアニミズムの神聖性のように崇高で、その重厚な存在感から、自然の中で堂々と生きるクマをイメージしました。

真一文字に口を結び、鼻孔を膨らませ、直立したグリズリーの、銀色に光った眼球は、どこに焦点があっているのかわからず、なんとも不気味カワイイ。明らかにクマの具象彫刻でありながら、これほどまでに巨大なクマが何頭も直立しているというのに、恐怖を覚えるどころかユーモラスで、近寄って撫で回したくなる衝動に駆られる。ごろんと寝そべり、天を見上げる小熊《ANIMAL 2020-02》（写真3）にいたっては、その間抜けな様子に声を出して笑いたくなる。

いっぽう、フランソワ・ポンポンの《シロクマ》（写真4）は、三沢が彫るグリズリー



写真1 「アニマルズ」展第一会場
(2021年8月27日廣田撮影)



写真2 「フランソワ・ポンポン」展会場
(写真提供：名古屋市美術館)



写真3 《ANIMAL 2020-02》
(2021年8月27日廣田撮影)

のような鑿目はなく、つるんと滑らかだ。単純化された形態からは、実物のクマを写實的に表現したものではないことがわかる。それなのに、前後にずれた前足や、今にも手前に動きそうな後ろ足を見ると、悠々と歩むシロクマの背景や空気の温度までを瞬時に体感したような気持ちになる。

三沢厚彦とフランソワ・ポンボン。二人の彫刻家が、まったく異なる時代に彫ったクマは、ともに具象彫刻でありながら、本物のクマを写實的に捉えてはいない。しかし、それが本物のクマ以上にクマらしいのは、いったいなぜなのだろうか。本稿では、両者がどのような過程を経て、どのように動物をモチーフとした作品と向かい合っている／向かい合ったのかを追い、モノを見て表現するとはどういうことなのかを考えてみたい。

2 三沢厚彦とその時代の美術

1961年、京都市紫野生まれの三沢厚彦は、あるインタビューで、小学校の卒業文集に「彫刻家になりたい」と書いていたことに触れ、その背景には京都市内に多くあったロダン彫刻、生活に身近だった寺院と仏像、美術館で見たロートレックやジャコメッティの展覧会があったと答えている。また父が買い求めた美術関係の本『近代の美術』シリーズで知った円空（写真5）、橋本平八、高村光太郎の



写真4 《シロクマ》1923-1933年
(写真提供：群馬県立館林美術館)

作品に感銘を受け、木彫に興味をもったのだとも語っている〔岡田 2020: 41; 土方 2021: 73〕。卒業文集どおり、彼は美術系高校の彫刻科から東京藝術大学彫刻科へ進学。1989年に東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修士課程を終え、2000年から等身大の動物の木彫《アニマルズ》の制作を始めた³⁾。

本稿で記述している二人の彫刻家は、それぞれに異なる素材で彫刻作品を作っている。三沢作品のほとんどは木彫だ。木を選択したことについて、彼は高校の実習でクスノキを使ったとき、木を彫ったときの感触が非常によく、匂いもよかったことから、東京藝術大



写真5 円空作 観音菩薩像
西尾市指定文化財、浄名寺
(2021年2月22日廣田撮影)

学入学時から木彫をやる決めていたと語っている [岡田 2020: 42]。また、人体ではなく動物をモチーフにした理由については、人物の場合はヌードか着衣かの問題があるが、動物は裸の状態で柄と色を持っており、それぞれ個性が強く、そのままの感じが素直に出せると答えている。加えて動物は、ゾウからヤモリまでスケールに大小があり、色も形も千差万別なのが面白い、やればやるほどに、課題を与えられるとも説明している [三沢 2007: 159]。

これらのエピソードに加え、前述した幼少期の影響もあるだろう。たとえば《アニマルズ》作品群の特徴ともいえる意図的に残した鑿目の魅力は、円空仏の仕上げとの共通性を明らかに指摘することができる。円空仏の素朴で力強い姿を幼少期に見て感じた体験をもつ三沢は、彫った痕跡の残った木彫が、見るものの視覚を通じて触覚を喚起するということを本能的に感じ取っていたのではないだろうか。「彫刻はその根源に触覚性を孕んだ芸術」 [土方 2007: 141] という言葉のとおり、三沢のつくる《アニマルズ》からは、見ていだけなのに、なぜかそのものに触れているかのような、視覚と触覚がひとつになって楽しめる要素が多く含まれている。こうした人間の本能を刺激する動物彫刻だからこそ、堅苦しい美術作品鑑賞という垣根を超え、老若男女に幅広く好まれるのだろう。

3 《アニマルズ》の彫刻群

2000 年から始まった「アニマルズ」シリーズは 2007 年から全国巡回展としてさまざまな手法で展示会場と呼应しながら発表されている。写実性という意味で、《アニマルズ》はけっしてリアルな動物ではない。特段誇張した表現というわけでもないが、我々の目の前に立つ《アニマルズ》は、一般的な犬、猫という概念を超越し、動物そのものの個性の塊が存在している。三沢にとって、実際の動

物に忠実につくることは単に本物に似せる作業なのだという。しかし、対象とする生きた動物には体温があり、つねに動いている。そこで三沢は、写実的に動物に似せた木彫をつくるのではなく、動物らしさを自身で咀嚼し、そこから作品制作を始める。

一般的に彫刻家は、作品制作の前にスケッチやマケットをつくり、そこから実際の作品制作に入る。しかし三沢の場合、マケットは一切つくらず、素描を行っている。「らしい」感じを頭に入れるためにドローイングをし、絵から動きなどを自分の中で反芻して、彫刻に移す [土方 2021: 75]。さまざまな動物を描き、彫り続ける三沢は、ほとんど実物の動物を見ないで彫刻を彫る。「動物園などで見ると、自分の持っている印象よりも、ちょっと元気がないことが多い。それなら観察するという感じではなく、自分の中での動物像みたいなものをつくりあげていくほうがおもしろいんじゃないか」というのが自身の考えなのだ [三沢 2007: 154]。

「アニマルズ 2021 イン・トヨハシ」展では、それぞれの展示室で、彫刻作品に呼応するように、その動物の平面作品も展示された (写真 6)。カラフルな色で描かれた動物のスケッチは、それだけで平面作品としても成立している。こうした二次元と三次元の共演は、三沢本人が、彫刻は作品がモノとして存在しながら、それで完結するのではなく、展示され



写真 6 会場風景

(2021 年 8 月 27 日 廣田撮影)

た空間や見る人のメンタルに接続していく表現だと考えているからなのだろう。

北海道立近代美術館学芸員の鎌田亨は、三沢の《アニマル》を、「フォルム（形態）やマッス（量塊）、ムーヴマン（運動性）を獲得するために、近代彫刻の根幹を成すこれら造形要素を獲得するため、動物の姿を借りているのだ」と記している⁴⁾。この言葉を裏付けるかのように、三沢本人は「パイブレーションというか、動きがないと、僕は彫刻じゃないと思うんです」[文藝春秋 2008: 220]と語っている。

こうして改めて三沢が生み出す《アニマル》群を見ると、愛嬌のある、どこかマヌケにも見える「動物らしい」ポップな木彫作品が、実は近代彫刻の根幹要素であるフォルム、マッス、ムーヴマンを移し込んだ彫刻の王道であることに我々は気づかされるのである。

4 ポンポンとその時代の美術

今から 160 年以上前、パリで最初の万国博覧会が開催された 1855 年、フランス中部、旧ブルゴーニュ地方の木工家具職人の家でポンポンは生まれた。幼少期から、父の見習いとして家具工房で働き、15 歳になると、墓石を彫る大理石職人の見習いをしながら、ディジョン市の美術学校夜間課程に通い、建築、版画、彫刻を学んだ。19 歳で、ディジョン彫刻コンクールに出品して 1 等賞を獲得している。それ以降、さまざまなコンクールに挑戦しながら、装飾彫刻、著名な彫刻家の作品の下彫り仕事を続けた。20 歳になると、ポンポンは彫刻家を目指してパリへ行き、墓石店で大理石職人として働きながら、プティット・エコール（Petite École: 国立素描学校）の夜間課程でデッサンや彫刻を学んだ。

彼にとっての大きな転機は、1890 年 35 歳の時に、19 世紀を代表する近代彫刻の父、フランソワ＝オーギュスト＝ルネ・ロダン（François-Auguste-René Rodi, 1840-1917）⁵⁾

の工房に石彫師として入ったことだろう。3 年目には工房長となり、ロダン作品の下彫り仕事を通じて“ヴォリューム（塊）”と“ムーヴマン（動き）”の関係を身につけていった。ロダンは下彫り職人たちにルーヴル美術館で古代ギリシャ・ローマ彫刻から学ぶように助言をしており、この頃から、ポンポンはエジプト美術や日本美術のシンプルで神聖な彫刻に影響を受け、リアリズムからモダニズム的簡略化を試みるようになっていく。この時期が後の“ポンポン・スタイル”を確立する契機だったといえよう [コラ 2021: 9]。

従来の彫刻の概念を打ち破る、モダニズム的簡略化による動物彫刻の萌芽は、ポンポンが 50 歳になってからのことだ。それまでヨーロッパの彫刻史において、動物芸術は格下として扱われていた。しかし 18 世紀末にパリ旧王立動物園が開館し、動物観察や解剖研究の場としての地位を得ると、写実に基づいた動物彫刻が見直され始める。19 世紀半ばになると、写実に基づいたアントワーヌ・ルイ・バリー（Antoine-Louis Barye, 1795-1875）⁶⁾の彫刻によって動物芸術に注目が集まるようになった。この時代、ブロンズによる複製技術が向上したことも相乗し、ブルジョワたちはこぞって動物彫刻を購入するようになった。1910～40 年代にかけては、欧米を中心に美術デザインの新たな様式アール・デコが生まれ、生活に近代的感覚を先取りしたい上流階級に人気となる。照明器具、床材、壁材に幾何形態を多用し、高級木材、陶磁、鑄造の技術を用いた室内装飾も多く作られた。こうした時流の中、動物をモチーフとした芸術、装飾品に対する関心も高まっていったのだ。

写実的な動物彫刻が主流だった中で、ポンポンは動物の形態を限界まで簡略化し、滑らかな直線と曲線によってその動物の本質を表現していく。ここには彼がエジプト彫刻から学んだ「動物は神の象徴」という思想も反映されているのだろう。従来の動物彫刻と

はまったく異なり、シンプルな造形に基づく点で革新的なポンポンの生み出した表現方法は、1920～30年代のフランスの彫刻家に影響を与え、20世紀前半の動物彫刻黄金期へ繋がった〔今井・深谷・見原編 2021: 37〕。

ポンポンが《牡豚 (Truie)》や《雉鳩 (Tourterelle)》(写真7)を制作した1908年は、ジョルジュ・ブラック (Georges Braque, 1882-1963)⁷⁾の作品が「キューブ」と命名され、キュビズムが始まる時期と重なっている。彼自身が影響を受けたエジプトや日本美術の簡素化されたフォルム、そしてブラックのキュビズム、また彼の出自である工芸職人の意匠に対するこだわりが重要な要素となり、ポンポン独自の動物彫刻のスタイルが完成したといえる。

彼がようやく注目されるようになったのは、1917年、62歳の時である。この年、彼の石彫作品《雉鳩 (Tourterelle)》がリュクサンブール美術館 (Musée du Luxembourg)⁸⁾に収蔵され、グルノーブル美術館 (Musée de Grenoble)⁹⁾が数点の作品を購入したことを機に、彼の名が知られるようになる。1922年、67歳のときサロン・ドートンヌ (Salon d'Automne)¹⁰⁾に出品した長

さ2.5mの大型石膏彫刻《シロクマ (Ours blanc)》で高い評価を得た¹¹⁾。さまざまな素材で複製された卓上サイズの《シロクマ》は、アール・デコ様式の室内に調和する動物彫刻として蒐集家に好まれた。この《シロクマ》は名古屋市美術館で開催された展覧会で、当時の大きさのままレプリカで展示され来場者を驚かせた。

上述のように、ポンポンが自身のスタイルを発見し活躍したのは晩年の短い間だった。彼は1933年、77歳でこの世を去り、翌年にパリ国立自然史美術館の植物ギャラリーにポンポン美術館が設置された。

5 ポンポンと動物

《シロクマ》で一躍彫刻家として名声を得たポンポンの作品は、クマに限らず多くの動物をモチーフとしている。自身が飼っていた鳩や猫、犬といった身近な動物から、別荘のあったノルマンディー地方の田舎で見たアヒル、ガチョウ、牛や豚など。また動物園で目にしたヒグマやキリン、カバ、ペリカンなど異国の動物も作品となっている。

彼の動物彫刻に生命感と動きを与えたのは、農場を自由に走り回る鶏、動物園の動物の正確な描写と、ロダン芸術が示してポンポンに大きな影響を与えたヴォリューム (塊) とムーヴマン (動き) という近代彫刻の要素だった。いわゆるアカデミックな技術を重視した制作姿勢は、彼が「古代の伝統にのっとって彫られ、何世紀も経て残る大理石と石を賛美し、自身もルーヴル美術館に展示されているような、後世まで残る美術作品を生み出したいと願っていた」ことからよくわかる〔コラ 2021: 9〕。

それぞれの動物の形態と動きを綿密に観察し、スケッチを重ね、流れるような美しい線を描く。抽象的で図案化されたような印象の形態には、ポンポンの視点を通して生まれた、実物以上に実物に近い動物の本質が、最大限



写真7 《雉鳩》ポンポン作
(写真提供：群馬県立館林美術館)

の魅力とともに形となって存在している。限界まで削ったところに濃密に残った生命力、生き物の本質が、凝縮されて彫刻の中に留まっている。

6 モノの「本質を観る」ということ

作品のモチーフとなる動物をほとんど見ないで、「動物らしき」ものを実物大で彫る三沢厚彦。

田舎で走り回る鶏を飽くことなく素描したうえで、フォルムを限界までそぎ落とした中に、動物の本質を写しとったフランソワ・ボンボン（写真8）。

生きた国も時代も異なる二人の彫刻家が追い求めたのは、対象である動物のもつ“バイブレーション”、“フォルム”、“ヴォリューム/マッス”、“ムーヴマン”だった。写実表現をとことん追求すれば、それはスーパーリアリズムの世界へ繋がるが、写真にはどうてもいかなわないだろう。しかし三沢とボンボンは、そのものの本質と向き合い、そこから生まれる真実を、それぞれが得意とする素材で表現した。

思い起こせば芸術大学進学を目指して毎夜

石膏デッサンをしていた筆者の受験生時代、美術予備校の先生からは「目で石膏像を撫でてみなさい」とよく言われたものだ。自分の眼で触り、頭の中で掴んだ石膏像のフォルムとヴォリュームを、木炭紙の上で再現しろというのだ。観察するということは、自らの眼で対象に触れ、感じる。視覚と触覚が交差しながら、対象のフォルムを確かめ、ヴォリュームを感じ、ムーヴマンを理解して写しとる。

もちろん、受験のための石膏デッサンでは、対象の質感、形態、動き、量感、光の流れを正確に描き移すことが最重要課題だった。しかし、そこまでの技術が備わったその先には、表面的な複写ではない、対象の本質を感じて写し取る、あるいは対象のもつ本質を、より明らかにし、抽出して表現する力が求められる。二人の彫刻家は、その本質を見極めるという意味では、まったく同じ作業をしていたのだ。

彼らがモチーフである動物に、また自身の作品である彫刻に向き合う姿勢、モノの本質をしっかりと見極め理解する力は、けっして芸術家にだけ必要な能力ではない。我々人間が人と関わり、世の中の事象に目を向けながら生きていくうえでも必要な能力なのではないか、と思わされる展覧会であった。

<注>

- 1) 日本初のボンボン回顧展は名古屋市美術館開催の後、群馬県立館林美術館（2021年11月23日～2022年1月26日）、佐倉市美術館（2022年2月3日～3月29日）、山梨県立美術館（2022年4月16日～6月12日）を巡回。
- 2) 別名アメリカヒグマ。北アメリカに生息するクマ科の大型動物でヒグマの一亜種。
- 3) 現在は武蔵野美術大学特任教授。
- 4) インターネット資料「アーツスケープ」を参照。1840年フランス、パリで生まれる。14歳で帝国素描学校に入学し、彫刻作品を

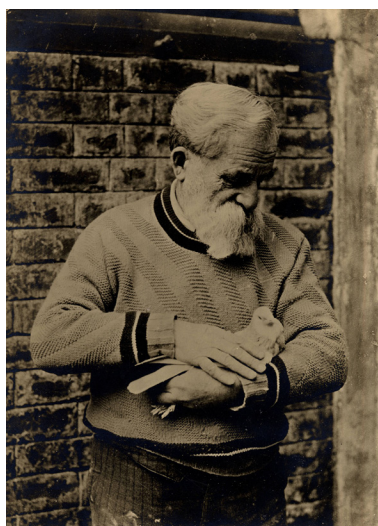


写真8 鳩を抱くボンボン（撮影年不詳）
（写真提供：群馬県立館林美術館）

制作。1880 年、装飾美術館の依頼で制作したダンテの『神曲』をテーマとした作品《地獄の門》(1888 ～) から派生した《考える人》(1880) は世界的に有名。

6) 動物彫刻で知られるフランスの彫刻家。19 世紀に動物を写実表現した芸術家は「アニマリエ (animalier)」と呼ばれた。

7) フランスの画家。20 世紀初頭、パブロ・ピカソとともにキュビズム (Cubism: 立体派) を創始した。ピカソの《アビニョンの娘たち (Les demoiselles d'Avignon)》(1907) は、それまで具象絵画が 1 点の視点から描かれたのに対し、多様な角度から対象を眺め、ひとつの画面に表現するものだった。翌年からピカソとブラックは共同でキュビズムを追求するようになり、この活動はブラックが第 1 次世界大戦のためフランス軍に召集される 1914 年まで続いた。

8) 1750 年、リュクスサンプール宮殿内に設置された美術館。現在、収蔵品はルーヴル美術館、オルセー美術館へ移管されている。

9) 1798 年に設立されたフランスの美術館。イタリア・ルネサンスから現代までの近代美術作品を収蔵している。

10) 1903 年にアンリ・マティス、ジョルジュ・ルオーらが中心となってフランスで始まった展覧会。フォーヴィズム、キュビズムの誕生のきっかけともなった。絵画、彫刻、装飾美術など多様な分野を網羅する展覧会として現在まで継続している [Le Salon D'Automne 2021]。

11) 発表後、大人気となった《シロクマ》は、大理石のほかブロンズ、銀合金、セーヴル磁

器に素材を変え、卓上サイズの複製が作られた。名古屋市美術館では、展覧会場入り口に設置されている。Sketchfab のサイトでは《シロクマ》を 3D で見ることができる。

<参考文献>

今井美樹・深谷克典・見原由希子編 2021『フランソワ・ポンボン——動物を愛した彫刻家』美術デザイン研究所。

岡田京子 2020「三沢厚彦——木に体ごと挑む」『初等教育資料』東洋館出版社、pp. 40-44。

コラ、リリアーナ 2021「フランソワ・ポンボン 1855-1933」今井美樹・深谷克典・見原由希子編『フランソワ・ポンボン 動物を愛した彫刻家』美術デザイン研究所。

土方明司 2007「三沢厚彦 “ANIMALS”」三沢厚彦著『ANIMALS+ MISAWA ATSUSHIKO』求龍堂、pp. 138-143。

土方明司 2021「土方明司の知りたい！美のヒミツ 第 16 回三沢厚彦」『月刊美術』8 月号、pp. 72-77。

文藝春秋 2008「新表紙アーティストインタビュー 三沢厚彦 “文芸誌は彫刻的ですね”」『文藝界』1 月号、pp. 218-221。

三沢厚彦 2007『ANIMALS + MISAWA ATSUSHIKO』求龍堂。

インターネット資料

Le Salon D'Automne 2021

<https://www.salon-automne.com/fr> 2022 年 1 月 7 日閲覧。

Sketchfab

https://sketchfab.com/3d-models/ours-blanc-francois-pompon-b69e8b094cfb44aa9de4d796bec1860e?utm_medium=embed&utm_campaign=share-popup&utm_content=b69e8b094cfb44aa9de4d796bec1860e 2021 年 10 月 6 日閲覧。

アーツスケープ 三沢厚彦「ANIMALS+」

https://artscape.jp/artscape/exhibition/curator/kt_0708.html 2022 年 10 月 13 日閲覧。